

決意新たに

高島良正*

平成8年は十二支の最初にあたる子の年で、この年には万物が滋る芽生えがあるといわれています。当九州環境管理協会は奇しくもこの年に創立25周年記念を迎えることになりました。子の年にふさわしく、当協会でもいろいろな業務が一層増大し、われわれの果たすべき仕事も次々に起こってくると思いますが、これまでの波乱の1/4世紀を乗り切った職員の力を結集して、21世紀に入る次の1/4世紀へ向かって前進したいと思います。

今年の元旦の早朝に、当協会創立者の一人である細川巖先生が逝去されました。故細川先生は現当協会顧問の竹下健次郎先生と共に25年前に当協会を設立され、つい昨年5月まで協会運営の中核におられました。25年前を振り返れば、当時日本経済の高度成長の歪みから生じた公害問題が全国的に起こった時代です。故細川先生は当協会のような水質や大気分析機関の必要性を察知され、竹下先生と共に人集めや資金集めに尽力され、小さいながらもその当時皆無だった公害分析機関の設立に漕ぎつけられました。協会はその後2度のオイルショックなどがあり伸び悩んだ時期もあるにはありましたが、概して直線的に成長し、今では約100人の職員をかかえる、全国的にも有数の環境関係の団体となりました。とくにここ数年バブル崩壊のため世の中一般は不況にあるといわれますが、当協会は相変わらず10%以上の成長を続け、次の1/4世紀への出発の明るい門出となりました。

昨年5月末の理事会において、前理事長のご推薦により不肖私が当協会第4代理事長に選任され、この一年間は理事長としての助走期間と心得色々勉強してまいりました。そして協会内では訪問者のゲストルームを備えたエネルギー・環境情報センター棟をつくり、また約1,500m²の九環境本体の研究棟も今年4月末完成予定で進行しています。この研究棟ができれば、職員の職場環境が一層快適となり、内部設備も最新の機器を設置しますので、業務の迅速化にもつながると考えられます。

一方、協会の定款や内規の類も大幅に改定され、清新な理事陣によって協会の近代的運営がなされることになっています。環境問題は人が地球上に住んでいる限り尽きることはありませんが、その質的な面は時代と共に変わって行きますから、これからどのようなことが要求されるのかを予測し、先取りしてゆく必要があります。そのためには自分の世界にだけ閉じこもることなく、目を大きく開いて国内問題はもちろんのこと、広く世界に目を向けてゆかなければなりません。その一環として本年から当協会は中国の放射線防護研究院との国際協力研究を始めることにしました。

平成8年度の政府予算案では24兆円も国債発行に依存し、前年度までの国債依存度の総計は200兆円以上に及ぶといえます。これは実に国民1人当たり大人から幼児まで入れて1人当たり約200万円の借

* (財)九州環境管理協会理事長 (九州大学名誉教授・福岡大学客員教授)

金財政ということになります，このような破産寸前の国家財政のもとで，今後景気を回復し，諸外国との経済競争力をつけることは至難の技です。19世紀に栄華を極めた大英帝国も，20世紀半ば過ぎ全盛を誇ったアメリカ経済も今や財政問題で苦境に立たされています。どんなに強大に見える国でも企業体でも永久不滅でないことは歴史の示すところです。まして当協会のような小企業体は好況といっても蓄積はわずかなものですから，常に研究開発に務め，堅実な安定成長を維持しなければ生きる道はありません。

「環境管理」の本号は財団法人九州環境管理協会創立25周年を記念する特集号として，古くから関わりのある理事の先生方や職員諸氏に広く原稿を執筆して頂き収録しました。右の写真は設立当時当協会の建物にとりつけられた表札で，初代理事長山田稷先生の書によるものです。古ぼけてはいますが何となく当協会と共に25年の風雪に耐えてきた風格が感じられます。

この表札を見て初心に帰り，前進の新たな原動力といたくここに掲載しました。

